

真夏の夜の夢

今年の暑い暑い夏に、私の見た真夏の夜の夢は、心頭滅却すれば、火も亦涼しと囁く夢ではなく、シエクスピアの喜劇である幻想的物語でもなく、又付随したメンデルスゾーン音楽でもなかった。
千代田城を囲んだ緑濃き大内山に、

院吟日本流精岳

あよち

号 5 第 1

報 弘 会 精 岳 千 代 田
平 成 1 4 年 9 月

平成十四年度岳精流指標

平和

会長 飯田 龍鷹

樋音高く響き、建設成った大厦高樓の威風堂々たる姿であった。
歐洲連合と言ひ。又世界各国の企業の連合は、統合的發展を目指して進んでいる。この大厦高樓も着工以來順調に歩を進め、明治・安田の経営統合問題は、早期の全面提携の動きが進んでいる。そこで詩吟部としても、文化交流の發展を加えてこそ真の統合であり、単に経営統合を目指すのみでは、世の爲、人の爲の活躍は展開出来ないと考える。
日本近代化に魁けて。明治十四年に創業の明治、同時期に共済五百名社を創立した安田、共に手を携えて新しい日本を造って来た。されば、めでたく茲に文芸興隆の道を開こうとするものである。朗々たる吟声が、千代田の杜に更に大きくこだまする日は近い。

吟と夏と思い出

日本列島は正に猛暑に苛まれ、眠られぬ夜を過ごしたが、然し去り行く夏にも思い出は沢山。合吟のあと皆でつまんだ枝豆の味、ビールの泡、三伏熱炒るが如き、教場での夏の吟汗、蟬時雨の音を聞きつつ夕方の教場へ急ぐ足、帰宅後湯船の中の一吟の清涼感、そして秋はやって来る。「立秋の雨」徳川光圀作「大火已に

西に流れ。郊墟に涼氣浮かぶ」
九月一日は二百十日、重陽は九日、彼岸秋分は廿三日、

秋の七草、萩、桔梗、葛、藤袴、女郎花。尾花、撫子そして天の川が輝き、十五夜、十六夜と爽涼の秋がやって来る。

秋と吟と歌と

秋は吟題が多く、選択は容易である。そこに歌も加えてみよう。
普段着で出来る赤本、岳精流の誇る教本である。ただ歌曲と詩吟の組合せでは、先ず音階を合わせなければならぬ。然し詩吟は短調だから短調の歌曲の場合そのまま合わせる事が出来る。詩吟は悲しげな調子：短調：が多い。

戦友 兵同士の愛情
月の砂漠 遠い異国の夢
浜千鳥 青い月夜の浜辺
稗搗の歌 平家の末路を悲しむ
麦と兵隊 兵の情 等々



昇伝・昇段審査全教場に高い評価

詩に情感を籠めて堂々と

風薫る皐月の十八日、市ヶ谷の宮崎県東京ビルで昇伝・昇段審査が遠田精敬副幹事長、大矢龍祐事業部長を審査員にお迎えして開催された。

今回も受審者は百十二名と大台を越えた。

両先生には、懇切な個別指導で、新しい会員には継続することの意味を、有段者には一人一人に技術的な教唆を数多く頂いた。

終了後の懇親会は、練習の成果を高らかに吟じた大勢の会員が出席し、やり終えた達成感で大変な盛り上がりとなった。遠田先生から「これだけ多くの審査をしてレベルが揃っていることは珍しい、安心して審査出来る来ました。皆さんの将来が楽しみです」とのお言葉を頂いた。飯田会長は「全受審者落着いて吟じていた、全員合格間違いなし」と挨拶された。昇伝審査申請書を本部に提出のところ、五月廿日付けで、受審全員に許証が届き、各教場で授与された。

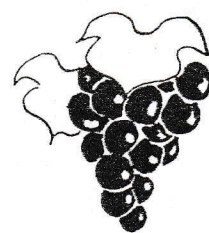
初めて昇伝審査を受けて

鍊水教場 仁木 正男

平成十四年五月十八日、初めて昇

伝審査を受けました。練習通りに吟ずればいいんだと思いつつ

も一抹の不安を持ちながら会場に臨みました。順番は私の教場が二番目で、丸の内第一教場の先輩達の審査を聞きながら自分の心を落ち着かせました。遠田先生のお話は「今日の吟は良かったという認識に立つことが大切だ。そして更にその吟の良さをどんどん伸ばすよう心掛けることだ」また「吟は単に吟じるのでなく作者の気持ちをも十分理解し、その雰囲気を感じている人に伝えられなくてはならない」更に「止めも初心者と高段者では同じではない。言葉の運びが大切だ」とのこと。誠に吟は奥深いものであると思いました。そうしていている中に私の番となり夢中で吟じました。日頃から教場長に「読みをはっきり」「止めをしつかり」「鼻濁音に注意」と教えられてきたが、あつと言う間の二分間、気が付いたら終わっていました。先生から「入門して間がないのに上手、これから数はこなす力をつけなさい」とご懇切な評を頂き感謝しました。これからは更に精進したいと思えます。



ハザマ教場誕生のうら話
ハザマ教場 山本 石泉

ハザマ社友会の理事会で忘年会が神田駅近くの勘定が安く海鮮料理が盛沢山あり、下町風情たっぷりという評判の三州屋で開かれた。

酔いも程よく廻る頃、突然佐藤甲泉さんが立ち上がり「皆さん私の下手な詩吟を聞いてくれませんか！」雑然とした宴会場が一瞬静まり返る。佐藤さんと言えは質実剛健、寡黙なシビルエンジニアの紳士として定評がある。私も長い付き合いで酒席の頻度も多いが詩吟どころか歌の一つも聞いた記憶がない。嘩然たる雰囲気の中で拍手が起こった。吟が始まる。

長寿吟 作者不詳

人生五十花なら薔

六十七十働き盛り

九十になつて迎えが来たら

百まで待てと追い返せ

詩吟の音階は水二本。低音ながら語調は明瞭で。能の幽玄な語りにも似て聞き易く、吟音が心に沁み込んできた。酔いを醒ます程の万雷の拍手となつた。あの人が、あの声で、たつたの一年で。嘆声よりも身近な事として訝るざわめきが拡がった。佐藤さんがやったんだ、誰にでもチャンスにくれた、俺にも出来るかもしれない。あの人にはついてゆけると思える仲間達が核となり、平成

九年平均年齢七十三歳のハザマ教場の誕生である。

五年を経ても一人の落伍者も無く、一期生全員が雅号を持つ喜びに浸れるのは、長寿吟との奇しき縁と、飯田会長の「継続は力なり」の言葉が光り輝くからであろう。



星野 久泉<清水>

特別な想いのある吟題で

清水教場 古川 章三

平成十四年度昇段審査会が宮崎県東京ビル二階和室で、大矢龍祐先生審査のもとで行なわれました。今回初段審査に臨み、吟題は徳川景山作「弘道館に梅花を賞す」を選びましたが、この漢詩は私には特別な想いがあるからです。私は「磯節」で有名な茨城県の大洗町に生を受け、鹿島洋の潮騒を枕音にして成長し、中学・旧制高校時代の八年間を水戸で学びました。水

戸は人も知る徳川時代以来義公・烈公藩主の下で文武両道、勤王教育の盛んな土地柄、この風土環境の中で多情多感な青春時代を過ごしました。まさに弘道館は水戸人の精神的シンボルであり、私は青年時代この詩を弘道館内で或いは大洗の海の巖頭に立ち、高吟して青春の気概を高揚させました。

当日はこの想いを胸に力一杯吟ずることが出来ました。審査の大矢先生からも「吟題の心をよく掴み声がよく前に出て大変良かった」と褒められ、「我が意を得て」終わって爽快な気分になりました。これを機に吟道に益々精進する所存です。諸先生の一層のご指導をよろしくお願いいたします。

雅号を戴きました

丸の内第二教場 島田 華泉

詩吟を始めて三年になりました。最初は声が出ず、詩文の理解も出来ず、文字を追うのに精一杯でした。大変難しく思いましたが、やっと声が少しずつ前に出るようになりました。審査は四回目でしたが、当日は順番を待つ間胸が高なり、緊張のしっぱなしでした。遠田先生は「上手い、下手じゃなく手数だ」と言われました。やればやるほど奥が深いと思います。

お名前を戴くことになりました。「華泉」喜びと希望を持たせて頂き、素敵な詩吟に謙虚な気持ちで長く長く頑張っていきたいと思えます。先生方、良いお名前有難うございました。

昇伝審査を受けて
丸の内第二教場 丸山 貞子

緑の美しい五月十八日、市ヶ谷の宮崎県会館で、岳精流の昇伝審査を受けました。試験を受けた事など初めてで、朝から緊張していました。一年前、お友達に誘われて教場を見学させて頂き入会いたしました。初めは声の出し方、吟譜の一つ一つが理解出来ず、途方に暮れましたが、岩崎先生、諸先輩のご指導と励みで、少しずつ吟譜や漢詩の素晴らしさも理解出来るようになり、本当に感謝しています。

審査の時は緊張で、無我夢中でしたが、審査の先生からは、ゆり止めについてご指導をうけました。これを機会に、正しく美しい詩吟を憶えられようように、努力していきたいと思えます。

初めての昇段審査
丸の内女子教場 板橋 和子

詩吟を始めて、まだ一年にも満た

ないのに、昇伝審査を受ける事になつてしまった。普段はそれ程熱心でなかつたのに、さすがに当日に向つて、何回かずつ毎日吟じてみた。練習をしてみても、何かいまひとつ確信がもてずに、不安が残るが、自分なりに何とかまとめて当日を迎えた。

審査会場の控室で、菅原先生、鈴木先生に練習をしていただいたら、思ったように声は出ないし、どう吟じて良いかが分からなくなつて、不安がつるばかりだ。しかし時間は迫つて来るばかり。いよいよ本番で部屋に入ったら、正面に大矢先生と岩崎先生が座つていらした。部屋に入つてからの方がむしろ気持ちが落着いた様な気がした。余計な事は考えずに唯ひたすら一生懸命吟じてみた。練習ではうまく出なかつたところも何とかクリアした様に思えた。本当に緊張した時間だった。

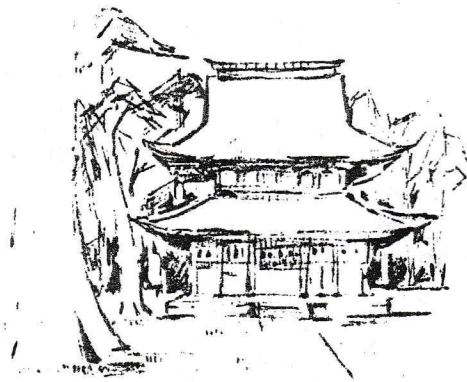
第三四回全国吟剣詩舞道大会 昨年に続き本部男子が挑戦

十一月十日武道館で開催の大会の全国合吟コンクールに、本部男子の再挑戦が決まり、宗嗣、川添龍真青年部長の指導で月二回、毎回三時間の猛特訓が本部で始められた。当会よりも十五名が出場します。当会健吟を期待し、応援しましょう。

『私の心に残る一詩』その八
ハザマ教場長 鈴木 重風

芳野懷古 藤井 竹外
古陵松柏吼天颺 山寺尋春春寂寥
眉雪老僧時頼帝 落花深處說南朝

昇伝審査の何たるかも弁えもなく飯田先生（当時は教場長）からの指示により、初めての昇伝審査を川崎の本部で受審した時の吟題が藤井竹外作「芳野懷古」でした。「力吟でした」の講評を審査の先生から戴いたとき、ホッとしたことや憶えています。転句の「眉雪の老僧時に帰くことを輟め」の一句に、私事ながら遠く故郷の古寺で、朝の勤行に勤しむ父を想い。落花、落葉を竹籠で集めながら額に汗した自分自身の幼年時代も、序でに憶い出したりしたものです。



平成十四年度昇伝者（略敬称）
お目出度うございます
中 伝 丸の内第一 大杉 緑山

初 伝 丸の内第二 東陽町 赤根 惇山
清水 大槻 鉾山
ハザマ 城戸 稲山

東陽町

神田

清水

ハザマ

鍊水

山本 石泉 山本 白泉 岩本 行泉 寺沼 智泉 井手 竹泉 宮武 保泉 木内 真泉 徳本 順泉 尾張 榮泉 橋本 淳泉 永岡 詠泉 南部 司泉 菊地 駿泉 植村 太泉 本莊 麗泉 八田 玉泉 山口 隆泉 廣田 了泉 渡辺 幸泉 島田 華泉 城戸 稲山 大槻 鉾山 赤根 惇山 山口 朱山 大杉 緑山

八月一日現在の、千代田岳精会の会員構成は、皆伝一名、奥伝十四名、中伝三十一名、初伝六十一名、無伝六十七名、合計百七十四名（うち休会中廿一名）となりました。

拍手喝采しばらく止まず

赤穂義士外伝「俵屋玄蕃」うら嘸

岳精流日本吟院創流廿五周年全国吟道大会で、二千人の会員を前に舞台の上で華やかに脚光を浴び、満場の喝采を受けた自主企画番組赤穂義士外伝「俵屋玄蕃」

主役の丸の内第一教場林 筑山氏、錬水教場加藤錬山氏をはじめ衣装、小道具担当、見難い黒頭巾で駆け回った黒子の方々、一人一人のご苦勞をうら嘸として寄せて頂きました。この外の多くの方々の、眼に見えない献身的な働きがありました。

大舞台で「俵屋玄蕃」を歌う
丸の内第一教場 林 筑山

今年の全国大会で、千代田は自主企画番組に出場する事になり、会長、副会長を中心に全員が参加出来る事を目的に検討を重ねて赤穂義士外伝「俵屋玄蕃」に決定。早速プロジェクトチームが編成された。劇団さながらに、まず監督、配役、衣装係、小道具係そして音楽係まで決めてスタート。そこで小生が主役の歌謡浪曲をやる事になり、大変な重責を感じた。

この大会の感想は、ちよだ十四号で何人かの方が寄稿されましたので、

ここでは側面から、うら嘸的に雑感を書いてみます。

まず、この歌は今から三十九年前に発売され「三波春夫」の名曲として歌い継がれているが、私が覚えた頃はカラオケも無く、自己流に歌い、曲の長さも六分位でした。今回村上恒山先生のご手配により、カラオケを入手する事が出来て有難く思ったのも束の間で、それから人には言えない苦勞の始まりでした。

それはまず歌が八分四十秒と長くなり、台詞も多くなっていた事、何回歌っても、語りと浪曲がカラオケに合わない事である。それから特訓に特訓を重ねる毎日、車の中は勿論、時には雨戸を閉めて昼間から練習した事もありました。大会が近づくと、私に失敬（台詞の絶句）をすれば剣舞と寸劇（会長の大石役、副会長の杉野役）が成り立たなくなると、大変なプレッシャーを感じるようになり、終わって今言えることだが一人苦しんだ。しかし心の支えとなったのは、多くの吟友の励ましの言葉でした。また、体に似合わない花粉症がひどく、花山さん、田中さんに特別な薬を戴いて、声が出るようになり大変助かり感謝しています。

大会当日は、貸衣装を青木さんに着付けて貰ったら、人が変わったように前日のリハーサルよりも心が落ち着き出番が待ち遠しい程であった。今回は、耳塚昇山先生指揮のもと、女性陣も花を添え、参加者全員がそれぞれ役割意識に徹して一丸となり、大きな盛り上がりを感じたのは私一人ではないと思う。

最後に、全国大会は常に礼節を基調とし厳粛であり、何時も緊張感を覚える中で、無事「三波春夫」の大役を果たす事が出来、この紙面をお借りして参加者全員に心からお礼申し上げます。



嗚呼「武士の誉れ俵屋玄蕃」

錬水副教場長 加藤 錬山

それは一瞬にして決定した。まるで試験管の中で酸素と水素が激しくぶつかり、忽ち反応して純粋なH₂Oが生まれる程の早さであったろうか。「それ」とは自主企画番組打合せの時の千代田幹部の反応の事である。「よしっ！俵屋だ」何という見事な早さであろう。与えられた難題を、それも避けて

通る事、非礼と心得えれば「ならば一閃、見事にあの扇の的を射抜いて御覧に入れたし」那須与一の心境もかくばかりかと思われる第一声だった。やるからには一所懸命にという力強いスタート、それにしてもこれだけの決定力を見せるあたり、さすが明治生命、日頃の「遊び方」が違う。長年の文化活動という鉱脈が、歴史と伝統に裏打ちされて、品質良く、分厚い層となつて埋蔵されている事を実感した。

そして愈々練習がスタートしたが、実に楽しみの連続だった。芝居のこなど判らぬ事だらけを皆で分担手配して調べていった。古い映画を捜す。大河内伝二郎の映画がある。阪妻にも逢った。あゝ嵐寛ではないか。近くは里見浩太郎の内蔵助。長子主税に教える切腹の作法など、著作権料も払わず頂戴「済ミマセン」。刀が要ることになった。偽物でも一振一万八千円はする。とても整え得ぬ処、本田さんの奥さんが子供会に催しで、なんと六百円で揃ったとの事、しかも大小二本に十手付きとか。お話を頼りに日暮里の駄菓子屋横丁を訪ねて、十数人分調達。店の婆さんには「大口注文過ぎるから、分割で納品させてほしい」と言われながら「討ち入りですか？」と図星を指された。最早この時から、小店の婆さんにも見破られる程芝居掛か

った顔つきで、目は吊り上がっているのか？（姿、苗字を偽って江戸市中潜伏などとてももの事）そう言えば、別の日に歯医者で「加藤さん」と呼ばれた。生憎と長い廊下風の所を通って診察台に辿り着く造りになっていった。廊下の途中でふと我に返った。「何で俺は今しずしずと摺り足で歩いてるのだ、切腹に赴く内匠頭の雰囲気です」看護婦の顔を見たら気付かなくていいようにホッとした。そんなこんなで本番間近になって来た。とところが殆ど練習らしい練習をしていない。皆感心するほど度胸が良い。大黒柱の「三波春夫」は完成品だが、周りでやる芝居方の呼吸が、気の小さい私なんか、もう一体どうなるのか、いっそ「海外出張」とか「入院」してしまおうかと。その内ビラを二千枚も配るといふニュース「大きな風呂敷敷だな、まあ全員で楽しく、大真面目のエネルギーだ。ぶちかましの相撲をとれば悔いはない筈」と心に決めて当日を迎えた。天は自ら助くる者を助くとか、あれこれ喰違いこそ最高の面白味、懸命振りとお客さんに受けとめて戴き、久方ぶりに本心に心の底から愉快な経験を見せて頂きました。何事も他人の働きかけを受けてみて、頑張ってみる。その先に感動と喜びがあるのだなと勉強させられました。日頃活発、多士済々の千代田二百

名、文化の鉱脈、人材は金銀はおろか、まだまだダイヤモンドの原石がごろごろの筈。爪を隠しておいで、そのこの大女優、往年の二枚目殿、ご登場のご用意をお願いしますよ！。

「赤穂義士外伝」

衣装・小道具を担当

丸の内第二教場 杉野 統山

教場の稽古の後、喫茶室で皆とお茶を飲んでる時に、磯田副会長より「今年の全国大会で自主企画を千代田が担当する事になり、俵屋玄蕃を演じたらどうか」と提案したと話を編成し、脚本・演出・小道具係を決めなければというお話でした。たまたまその時に衣装・小道具なら借りる所を知っている（実は息子が映画関係の仕事をしているので）と言ったのが運の尽きで衣装・小道具を担当する事になりました。早速帰って相談しましたところ、全員の絆纏、槍、大石の小道具、三波の衣装等で可成りの金額だが予算はどうだとの事、何しろ少ない予算、そこを何とかと交渉しました。正式にプロジェクトが一月三十日に東陽町で第一回の会合を持ち、その時に副会長より絆纏は購入する事とし、浅草の仲見世で下見しておいたとの事でした。後日その店を訪ね

たところ既に売切れており、他を探しました。結果どうにか納得の線まで下げて購入しました。次に大石の小道具と三波の衣装ですが、衣装は無料にして貰い、小道具も予算より安くして貰い、当日の使用となりました。何はともあれ全員で臨んだ自主企画が大成功に終了した事が、一番の喜びだったと思います。

黒子の役を仰せつかつて

錬水教場 仁木 正雄

創流廿五周年全国大会は、入門日浅く、諸事に疎い私には役がなく、手持ち無沙汰だった。突然黒子役が回ってきた。NHKの「お江戸でござる」を毎週見ているので「あれかア」と若干落胆の気持ちがあった。リハーサルにも一回しか参加出来ず、何とかなると軽い気持ちでいた。当日、黒子頭巾なるものを渡された。被ってみると真っ暗で先が見えない。「舞台上に上がれば透けて見えるよ」と言うことで舞台上に上がった。以外に広い、上手の袖に切腹の袋、模造紙の雪、玄蕃のセット袋と準備万端、出番を待った。

の後ろに踞り、桜吹雪の機会を待った。ここぞと思いい吹雪を「チラ」、どっと爆笑が湧いた。次からが大変だった。上手の舞台係が呼んでいる。舞台裏を駆け回ると「舞台が暗転したら綴帳を降ろすので合図してほしい」との事。初耳だし、第一タイミングも判らない。押問答をしているうちに吟詠隊が整列して音楽が始まった、見ると玄蕃が仁王立ちしているではないか。が飛ばされた勘違いし、慌てて玄蕃の小道具を袋から出し、徳利（水が入っている）盃、鉢巻を盆にのせ、黒子頭巾から透かして見ながら玄蕃の前に持っていた。舞台の袖から玄蕃まで以外と遠い、黒子だから中腰、水かこぼれない様に気を使いながら玄蕃の前へ「まだまだ」突然玄蕃より声「え！」と思いい再び長い道程を帰って来た。汗がどっと出た。間奏の間に舞台いっぱい雪化粧の模造紙を敷くため走り廻る、先が見えない、やむを得ず前を捲ったがすぐに落ちてくる。左手で頭巾を押さえ、汗だくで雪化粧を払って終えた。終わったと、越村氏と顔を見合わせた。いつの間にか二、三人を残して潮が引くように千代田の人は居なくなっていた。舞台係から「紙吹雪を片づけて」の声を背中に受け、長い模造紙を畳み紙吹雪も一枚々々拾

い控室に持ち帰った。小道具を一つ一つ丁寧に紙で包み袋に入れた。二時を過ぎて、やっと昼食にありついた。越村氏は弁当を喰べる気力も無かったようだった。



「赤穂義士外伝」の黒子として

錬水教場 越村 淳

準備段階に於て、舞台設営の役割を仰せつかりましたが、当日の朝、急遽「介錯人」を命ぜられ、まさに青天の霹靂！固辞しましたが、加藤錬山先生の準備万端怠りない用意周到さに、断わり切れずお引き受けするハメに。

リハーサルを行なった処、刀は以外と長くスラリとは抜けません。厚かましくも控室においでの場合の先生に抜刀の術を即興でご伝授頂きました。左手で鞘を引上げ、抜く瞬間に腰を回転させ乍ら鞘を下げつつ抜刀する。と極意を授かり無事？大役を終えました。小学校以来の学芸会は冷汗三斗で

十二月三日(火)中野ゼロホールで開催

全教場研鑽の成果披露の温習会

千代田岳精会八教場、一分教場の全会員が一堂に会して、成果発表を行なう温習会は研修部門のご努力により昨年に続いて中野ゼロホールの小ホールを手配しました。ご存知の通り設備は申分ないが、公共施設で抽選により決まる為、残念ながら希望の土曜日に出来なかった。

仕事との関係で、厳しい方もあると思われるが、今から調整し一人でも多くの会員の参加をお願いします。今回は、無伝の部の全員が出吟する独吟コンクールと、教場毎に割り当ての時間を、独自の企画で取り組む新しい内容が中心となっております。

平成十五年全国吟詠コンクール

三月廿九日開催される岳精流全国吟詠コンクールの吟題が発表されました。(平成十五年度昇伝審査の指定吟題にもなっております)

○百忍の詩	中江 藤樹
○雪中の雑詩	市河 寛齋
○江戸客裏雑詩	頼 杏坪
○七歩の詩	曹 植
○春初感を書す	安積 良齋
○問梅閣	高 啓

『新会員紹介』

◇丸の内女子教場
大塚 勢子さん(六月入会)

明治生命品川支社で主事をされている現役。丸の内第二の野沢柳泉さんの紹介で、都合のよい火曜日を希望されて入会。

吟への関心は中国旅行の際、添乗員の漢詩の説明に聞き惚れた事からとか、心を寄せる漢詩を立派に吟じられるよう期待しています

◇ハザマ教場
内田 測氏(七月入会)

学生時代(陸士↓早稲田)そして戦後期を通して、詩吟との付き合いを温めてきたとのこと。因縁は大事にしたいとの強い思いを持っておられます。

ゴルフは三五年のキャリア、油絵は五年と、まさに静動併せて人

生を謳歌されております。

座右の銘は「誠心誠意」とか

二宮祥修氏紹介。

◇東陽町教場
神津 信子さん(八月入会)

丸の内第二の廣田了泉さんの紹介で、現在明治生命東陽町ビルに勤務しています。朗々たる声量と音感の良さは、加えて物怖じしない度胸の良さは、まさに大型新人出現というところですね。大いに期待しています。

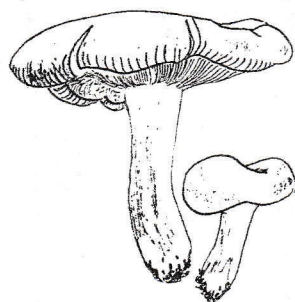
訂正とお詫び

十四号の新会員紹介に誤りがありました。お詫び申し上げます。

◇丸の内第一教場

誤：守谷屋サチ子さん
正：安谷屋サチ子さん

編集後記



今号は「俵屋玄蕃うら嚟」特集を組みました。主役、黒子、裏方それぞれ楽しくご苦労された様子が文間に滲みまします。急に視力が低下、文字のサイズを大きくしました。
窓外の空き地は、毎年薄が2米以上伸び、沢山の穂をつけます。今年には成育が良過ぎて二月前に地主が刈り込みましたが切株から出た若い芽がもう同じ丈に伸びて、見事な薄野になりそうです。
(八田)